沖

昭和45年創刊　平成27年2月1日発行（毎月一回一日発行）俳句雑誌　沖　第46巻第2号

2

俳句雑誌［おき］

栞

紐

能村　研三

年木積む風呂を貰ふといふ昔

重波は時雨岬を責め足らず

殉教の潮錆の町風疼く

炉語りの鬼の件に尾鰭あり

丁寧に暮らす

自註句集

昨年の暮に、俳人協会から自註句集シリーズ第十一期の『能村研三集』を刊行した。最初にお話をいただいてから十年以上が経ってしまったかも知れない。協会から頂いた指定の原稿用紙は、机の抽斗に眠らせたままであった。協会としてもこのシリーズをそろそろ終了させたいとの意向があり、昨年刊行されるのなら早くとの催促をいただいた。

昨年の暮の押し詰まった時期に何人かの親しい方にお送りしたところ、多くの方からありがたい反響をいただき恐縮している。

本年になってから、この自註シリーズの『松尾隆信集』をご本人からいただいた。そのあとがきには、俳人協会から原稿用紙が届いて十六年が経過してしまったことが書かれていて、思わず私だけではなかったのかと少しほっとしつつ苦笑してしまった。松尾さんも、やはり手をつけ

PDF= 俳誌の salon

稿債がありては年を惜しめざり

初明り胸中にある怒濤音

読初の書にくれなゐの栞紐

吉武千束句集『太古のこゑ』

耶馬よりの太古のこゑに淑気満つ

江渕渓亭句集『祭笛』

深耶馬にこだまを返す山始

小野寿子句集『角巻』

角巻は翼じよつぱり通しけり

たくても結社のことやお弟子さんの句集などでお忙しかったことと推察する。

さてこの俳人協会の自註シリーズはかなりの歴史を持っている本で、先師の『能村登四郎集』は第Ⅱ期として昭和五十四年に刊行されている。『定本咀嚼音』から『有為の山』までの六冊の中から抽出した三百句に自註が付けられている。そしてそのあとがきには「自註というものは前書と同じく著るしく句の香りを失くすものだという事を知った」とあった。本来五七五の十七文字だけで普遍性をもって完結するべき俳句からすればなるほどと頷ける。さらに、「しかし一句一句にまつわる思い出を書くことは自分の歴史を書いているようで意外と楽しいことでもあった。」とも書いている。これも然りである。

登四郎はこの時六十七歳で、私の今の年齢と近かったが、私ももっと若い時より、ある程度の年齢に達した時にこの本が刊行されたことが良かったと思っている。

能村　研三

PDF= 俳誌の salon

蒼茫集

うすごほり

大畑善昭

悼　渡辺昭氏

登四郎門十哲の人冬霞
一日は一矢の迅さうすごほり
冬の虹いま脱稿の八千字
北限の茶の花母の眠れる地
海どどんどどんと寒く哭くやうに
轟々と夕日の沈む冬礁

冬の波

安居正浩

外套や背けてならぬ負の歴史
冬の波別れるやうに逢ふやうに
毛糸編む母のまんまる眼鏡かな
冬帽子近江は眠り深き国
左肩たたく右腕神の留守
大根に三浦半島光りだす

皺の余地

千田敬

冬並木空の蒼さは未完なり
さへづりの記憶を枝々に冬木立
朝日子のあそぶ日溜り散紅葉
冬帽子八十路をとこの沽券とな
枯木星むかし男の黙は金
初鏡まだまだ額に皺の余地

冬

酒本八重

冬萌や未定無印子の未来
満洲といふ字は遥か暖炉燃ゆ
銀杏散る間に合はなかつた事ばかり
多羅葉に文字かき冬日豊かにす
余生とや残照柚子を匂はしむ
掌は己が手を温めぬる冬景色

PDF= 俳誌の salon

白鳥の腋　細川洋子

セロリさみどりさくさくと癒ゆるかな
着水の白鳥腋を緩めたる
青首大根さやかなるこころざし
消火器のぽつねんと冬ざれてをり
お袋に謝る息の白さかな
雪吊の天辺風を呼ぶ縄目

本の樹海　内山照久

曼珠沙華空へ炎の風車
本といふ樹海さ迷ふ夜長かな
己が身の何と小さき秋夕焼
背伸びして第九を歌ふシクラメン
功を褒め罪を忘るる忘年会
切株の切口薄く雪積もる

胸奥に　大川ゆかり

持ち帰る言葉色なき風の中
青空に立て掛けられてゐる案山子
果実酒に翳る実の色冬どなり
十二月珈琲豆を粗挽きに
飛び石の影うすうすと敷松葉
胸奥に梟の声受け止める

重波　荒井千佐代

よろづ屋の昏きより猫秋の昼
草の実や恋の終りの髪を切り
晴れしまま夜となり秋の祝ひ宴
原城の跡のどんぐり独楽にせむ
三島忌のすぐに谺のかへりけり
重波や秋思の目もて佇めば

発条　田所節子

黄落や金管楽器行進し
冬麗の自分史といふ和綴ぢ本
木洩れ日のやうにただよふ冬の蝶
日向ぼこ次への発条を溜めてをり
寒波くる捻子をきりきり漬物器
岬鼻やけふ冬帝の息荒き

PDF= 俳誌の salon

ビッグデータ　矢崎すみ子

冬銀河ビッグデータとは微細
時雨忌や百合根を花のやうに炊き
何処までのけふや朝や山眠る
水の青光のあをへ大白鳥
コスモスの花の座標に長居せり
木洩れ日は波郷の炎青嵐

無為の日　森岡正作

湯煙に晒す猟夫の深傷痕
一村の丸まつて住む小六月
生くるとは先達のなき枯野行く
火の国の綿虫にある炎の匂ひ
山茶花や武家の矜恃の今にあり
無為の日は寒三日月に斬られけり

枯菊　藤森すみれ

火の山は暮しの真中雪が来て
焼けるもの焼き枯菊を火の終ひ
大根・ねぎ囲ひ午後の日使ひきる
力ため初心に返る冬木の芽
裸木の影に省略なかりけり
神の木の走り根諏訪の冬摑む

いのちの香　望月晴美

松手入松はいのちの香を放ち
海といふひかりの器鳥渡る
参道で買ふむくつけき衣被
ふかふかの落葉踏みきて火照る足
聖樹飾る安泰の日の消防士
棒立ちにして不敵なる冬木かな

決断　甲州千草

冬田一望一枚は濡れてをり
登山鉄道最後に載せる師走の荷
冬ざくら二三歩寄れば日に和して
梟や耳掻くときは目をつむり
決断にほどよき光り冬の月
早々と篝火焚かれ冬の鯉

PDF= 俳誌の salon

冬霞

吉田政江

神還る朝靄すつと押し上げて
懸崖菊扇仕立の朱を開く

長崎支部五周年・島原

年輪の五重に枇杷の花育つ
冬霞うすれ天草引き寄する
硫黄臭芒の枯れを急かせけり
しぐるるや城址に遺恨の石無数

開封日

小松誠一

開封日大書きされて柿届く
止まり木は何時もと同じ衣被
動脈のやうな伏流山眠る
頻繁に震ふケータイ煤逃げて
蛇口より一番水の勢ひかな
本埜田に水漬き安らぐ小白鳥

頑張らないと

辻美奈子

鬼の子の頑張らないと飛ばさるる
正論を掲げられても小春猫
人形のまなこ漆黒クリスマス
着ぶくれて守りの姿勢甚だし
歳晩や戸締りをして落し蓋
冬すみれちひさき影をまもりけり

開戦日

高野槙　千田百里

開戦日西洋野菜溢れゐて
レノン忌やがくりと止るエレベーター
捨て印のごとき残月年暮るる
冬あをあを空海さんの高野槙
星は宝石つくば北風に研ぎ出され

悼　渡辺昭様

玄帝に召さる俳の真髄説きし人

青春派

宮坂恒子

新雪をさくさく踏んで青春派
潔白の証白菜真つ二つ
熊笹の尖り尖りて雪催
裏山に爪やはらかく熊眠る
足触るる炬燵は家の絆とも
刈田晴神の合唱聞えさう

PDF= 俳誌の salon

潮鳴集

蓋　菊地光子

煤逃や天丼の蓋盛りあがる
寒晴や遅参のドアの静電気
風花や名残りを刻む発車ベル
和太鼓の撥に小雪の舞ひ光る
マネキンの眼の虚ろ聖樹の灯

身の門　大沼遊魚

異次元へいざなふ小風草もみぢ
浮寝鳥水をねかせてしまひけり
炭火跳ね静けさの亦深まりぬ
万両や終の栖にゐて老いず
日向ぼこ身の門を全開に

ひと休み　栗原公子

小春日やけふは大人をひと休み
流さるる幸せもあり浮寝鳥
幸せのかたちいろいろおでん鍋
日記買ふまだ見ぬ吾に会ひたくて
眠りさへすれば明日来る冬の雨

岬　径　加藤富美子

溪渡る橋たかだかと薄紅葉

長崎四句

泣く如く城址の石や冬の雨
北風の打擲受くる岬径
声あぐる柱状節理冬怒濤
絵硝子のイエスの一世冬日差

PDF= 俳誌の salon

沖作品

能村研三 選

胡桃割る今日の一日仕舞ふ間に　長崎　円城寺　清

秋霖の往還かすみ龍馬の碑

望楼に灘の遠鳴り神渡し

冬ざるる球体重しガスタンク

印泥の艶も冷たき正座かな

一つづつ星生まれけり芒原　福岡　永尾　春己

猪の掘りたる土のやはらかし

石ひとつひとつに影や冬はじめ

走り根の窪みにたまる木の実かな

木洩れ日のスポットライト石蕗の花

大理石の床に靴音冬めける　千葉　竹内タカミ

黄葉してなほ膨らみし大樹かな

小さき手に拾ふもみぢの紅ばかり

黄落は滅びの最中輝ける

急流へ競ふがに散る紅葉かな

行き行きて尾花の海に溺れけり　岡　真紗子

玉砂利の音も冬めく寺詣

配膳の指美しや河豚料理

冷まじや憤怒みなぎる仁王の目

火酒ちびりちびりと小さき酒場にて　塩野谷慎吾

厨事学ぶ勤労感謝の日

脇役も主役もこなす大根かな

列あればうしろに並ぶ冬帽子

手のひらに納まるほどの熊手買ふ

顔出しも看取りの一つ花八つ手

大灘の紺を深めて時雨かな　伊藤よし江

沢風に尖る水音今朝の冬

海沿ひに単線鉄路安房小春

雑踏に追ふ冬帽の見えかくれ

深空や冬の木立の皆すくと

PDF= 俳誌の salon

沖作品15句選評

＊

能村研三

望楼に灘の遠鳴り神渡し　円城寺　清

ダイナミックな風景を詠んだ立て句だ。円城寺さんは、長崎の方。長崎は様々な海に面していて、穏やかな海と荒々しい海の両面が楽しめる。灘として知られる所は玄界灘や五島灘など。私も先日九州大会の帰り関東から参加したグループと玄界灘に面する生月島の大バエ岬を訪ねた。最北端に位置する大バエ断崖の上に立つ無人灯台の脇の望楼を登ると、三百六十度のパノラマの眺望で、荒々しい冬怒涛が絶壁を打ちつけていた。神渡しは日本ならではの言葉で、陰暦の十月、すなわち神無月に吹く西風のことをいう。神無月には、日本中の神様が出雲に集まると言われていて、この西風は神様を出雲へ送っていく風だということで、「神渡し」という言葉が生まれた。神渡しが吹いてきたので、遠くの海鳴りまでが聞こえてきた。

一つづつ星生まれけり芒原　永尾　春己

九州大会での収穫句。永尾さんは、本年同人となった小田里己さんと双子の姉妹。お二人で北九州市にある平尾台に吟行された句のようだ。カルスト台地である平尾台は羊の群れのように見える石灰岩が露出していて、秋も深まるとその間を埋め尽くすように、芒の穂波が輝き渡る。ここからは、夜になると星空と街明かりの綺麗な夜景が楽しめる。空気の澄んだ日には、ずっと眺めていると流れ星も見えるようだ。永尾さんは、それを一つづつ星が生まれる」と表現した。自然と同化した静穏な心持ゆえに生まれた表現だ。

黄落は滅びの最中輝ける　竹内タカミ

原句は「黄落や」であったが、中七、下五が黄落のそのものことを言っているので、「黄落は」とさせていただいた。私の家の近くの葛飾八幡宮の境内にある千本銀杏や、参道の銀杏並木の黄落も見事で、黄落がはじまると、いよいよ寒くなってくる。この豪著に舞い落ちる黄金の葉はただただ美しく見えるが、自然の摂理から言えば滅びの最中で、輝きながら降り注ぎ黄色の光を放ちながら哀切に満ちた場面を見せているのである。こうした黄落の中に単なる美しさだけでなく、滅びの色として捉える所に作者の滋味深い思いを垣間見ることができる。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon